



駿府と今川氏

第5回

北条早雲の妹北川殿と今川義忠の結婚

北川殿とはどのような女性だったか

従来、今川家七代目の氏親を生んだ北川殿と呼ばれる女性は、駿河守護今川義忠の側室として理解されることが多かった。それは、少し前まで、彼女の兄にあたる北条早雲が「どこの馬の骨ともわからない伊勢の素浪人だった」と言われてきたことと関係している。出自のわからないような男の妹が、名門であり、駿河守護を務めるほどの今川義忠の正室などになれるわけがないというのが理由である。

ところが、近年、北条早雲の出自に関する研究が進み、正式な名前は伊勢新九郎盛時^{いせしんくろうもりとき}といって、室町幕府の政所執事を務めた京都伊勢氏の一族で、新九郎盛時自身は、備中高越山城主伊勢盛定の子であることが明らかにされるようになり、義忠の側室などではなく、正室として駿府に迎えられたことがはっきりしてきた。

義忠が、応仁・文明の乱勃発にあたり、応仁元年（一四六七）に上洛しているの、上洛中に結婚の話がまとまり、駿府に戻るとき、彼女を伴ったのではないかと思われる。

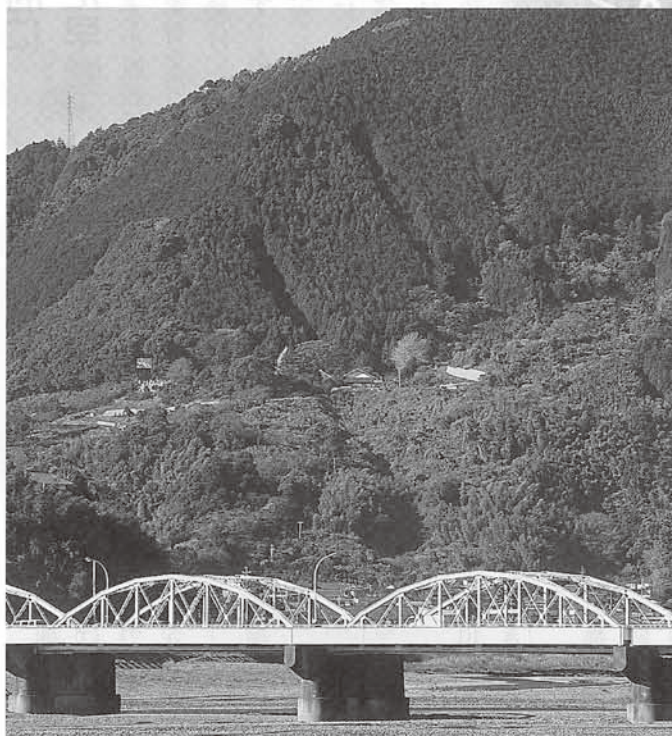
娘を京都の

正親町三条実望に嫁がせる

ところで、彼女はふつう北川殿の名で呼ばれているが、それは、彼女の屋敷が安倍川の支流北川のほとりにあったと言われているからである。安倍川の一部が、ちょうど現在の静岡浅間神社のところを北に向きを変え、麻畑沼の方に向かって流れていくが、屋敷は現在の臨濟寺のあたりにあったと言われている。

北川殿が亡くなった後、そこに富士郡の善得寺の支院である善得院が建てられ、さらに、今川氏輝の死後、そこに臨濟寺が建てられたというわけである。

義忠と北川殿との間に、はじめ女の子が生まれている。この子は長じて、京都の公家正親町三条実望に嫁いでいる。今川氏と京都の公家との交流は、すでに義忠のときに始まっていたことがわかる。



▲北川殿を祀る徳願寺（静岡市駿河区向敷地の徳願寺山中腹） 撮影：水野 茂

そして、文明三年（一四七一）に嫡男の龍王丸が生まれた。のちの氏親である。「辰王」と書かれた史料もあるので、読み方は「りゅうおうまる」ではなく、「たつおうまる」であろう。

龍王丸が六歳になった文明八年（一四七六）、父義忠が遠江の国人領主横地氏、勝間田氏の討伐に出かけ、戦いに勝って凱旋の途中、その残党によって殺されるという不慮の出来事が勃発し、今川家は内訌状態を迎えるのである。